

# 学校教育とレクリエーション

神奈川大学 山下 昭子

日常生活は、緊張と弛緩のよりよきバランスにより保たれている。その中でレクリエーションは、人それぞれによって、とらえ方が違ふし、またそれは自由であっても良いと思う。しかし、学校教育の場でのレクリエーションのみならず、レクリエーションは、お互いに影響し合えるものであることが望まれる。

まず自分自身が楽しむということ、それが自然に周囲の人にも影響を与えるという成果があつてこそ、その真価が認められるというものである。レクリエーションの必要性は、あらゆる面で、大体言い尽くされてはいるが、現在の日本でのレクリエーションを見回したとき、まだまだ普及の段階にあることは残念に思われる。

これは、学校教育の中においても同様である。まず指導者が環境設定をしてやる（ここ

ではレクリエーションのための）ことが最も大切であり、その上で学生自身に楽しみを優先したレクリエーションを身につけさせ、普及活動を始めるといった段階が必要であると考ええる。レクリエーションの必要性とは、職場のレクリエーションの場合、コミュニケーション・レク、すなわち、レクリエーションを通して人間関係をより良きものにする。また週休二日制の時代をむかえての余暇の過ごし方等と考えられている。学校教育の中のレクリエーションにおいても同じく、人と人（学生対学生）とのコミュニケーションである。家庭と学校が自分たちの世界である学生たちにとって、家庭での親子の断絶などさまざまな問題をかかえた現在、学校の中で人間関係や、学校教育を通しての日常生活の過ごし方を考えると、非常に大きな役割があると思

われる。

このようにみると、その役割の中での一手段として、学校教育の中でのレクリエーションは期待されるものが多い。こうしたことからその必要性を感じて実践した例をここに記したい。ただレクリエーションは、学校教育に必要だと一口で言っても、実践に移さねば意味がない。理論重視の指導者と実技重視の指導者に二分されるが、ここでは実践を重視、「口で言うより指導者がまず実践」をモットーとした例である。

まず学校教育にレクリエーションを取り入れてからの成果は目を見張るものがあった。対象は、短大初等教育科の学生、百五十名。場所は、音楽リズムの授業の中で取り上げる。実践方法は、次の四点に分けて記す。

一、授業中でのレクリエーションに対しての意欲

音楽リズムの授業で、レクリエーションの導入として授業の前後に、ソング・ダンス・ゲームをそれぞれ用い指導者の得意とするダンスの種目には特に力を入れた。(これは、スキップを大切に楽しみを優先としたものに気を配る)

ここでは大学の例であるが、大学という所は、多くの友達と語らうことも少なく特定の友人関係の者が多数である。その中でレクリエーションの授業は唯一の友と語らい、友と笑い、友を知る場となるように努めた。

## 二、レクリエーション同好会を発足

実践段階として、まず活動団体の母体となるものを発足させる。(これはわずか三、四か月で同好会として発足し、その後その活動が認められて一年後にはレクリエーション研究部となる)。これは結果として発足したもので、最初は学生たちに授業の中でレクリエーションの導入を指導したにすぎず、これからの初等教育科の教師として身につけてほしいという願望を含めて学外での研究会を試みて結果がそうだったのである。これは有料で

あったために希望者だけの参加で百五十名中、六十五〜七十名の希望者が参加した。研修会終了後、それがそのままレクリエーション同好会として発足したのである。

## 三、学内でのレクリエーション活動の実態

さつそく、学内での活動が活発となっていた。引き続き、年に一度学外での研修会(日本レクリエーション協会二級指導資格申請可能程度のもの)を行い、授業の中での前後十分間を学生のレクリエーション指導の時間とした(ゲーム・ソング・ダンスなど)。また昼休みを利用してレクリエーションダンスを学内の広場で行った。このための準備は一週ずつ指導計画を立てさせて実行に移した。この目的は自分たちの指導の勉強をしながら、一般学生への参加を呼びかけ学生間の交流を目的とした。雨の日は体育館で行った。その結果、学友会でクラブとして認められたのである。故に、学友会行事に参加することが出来、学園祭などには、活動範囲を広げ、前夜祭・後夜祭、昼間の広場でのレクリエーションの指導を始め、手造りのペンダントやペーパークラフトでの人形などの即売、更に教室一室に飾りつけをして、見学に来た一般

の子供たちのコーナーを設定し、「ゲーム」や「ソング」に「お話」「紙芝居」「折り紙」などのレクリエーション指導に余念がなかった。これらすべては学生の手で創意工夫され実行に移された。また学内での大きな行事として学友会と組んで年に一度のクリスマスパーティーも計画され、キャンドルサービスでは「火の長」を学長先生にお願いして、それは学生との交流の一端ともなった。これは日ごろの活躍ぶりを認めて下さった学長先生の好意でもあった。学内ではこのクリスマスパーティーは充実した行事の一つとなっていた。

## 四、学外での活動(特に市の主催による福祉関係行事・その他)

地域社会には指導者の専門がダンスということもあって、レクリエーションダンスを中心として展開された。学生たち自身が色々なレクリエーションダンスを創るようになった。NHKテレビのローカル番組でも紹介され、レクリエーションダンス・フェスティバルにも出演、レクリエーションダンス全国コンクールにも入選した。市の行事としては、施設の運動会その他にも協力を求められ、レ

クリエーション研究部としては全面的に協力し体験することがそのまま自分たちの大きな収穫となった。

学校教育の中でレクリエーションが、このような発展を遂げたのは「レクリエーションをいかに楽しむかというより、レクリエーションを楽しんでいたら、より良い人間関係が出来、周囲により良い影響を及ぼした」というレクリエーションの域に少しでも触れたからだと思う。それは学内の活動の歯車があつたという間に回り出し、学外にまで影響を及ぼした事、授業に取り入れたときの意欲的な創意工夫などがええます。実際に

学校行事参加での創意工夫、年に一度のクリスマスパーティーでの一般学生同士の交流と学長先生の参加による一層の盛り上がり、毎日の昼休み、学内広場でのレクリエーション・ダンスの指導など学内のコミュニケーションとして徐々に成果を上げていった。

以上の体験をしてきた学生たちは、「レクリエーションは人をかえる」の言葉どおり、学校を卒業してそれぞれの生活サイクルの中に入っても一度身につけた技術、人間性はどこへ行っても素晴らしい人間関係をつくるに更に影響を与えてくれることと思う。終わりに、ここでは、学校教育とレクリエ

ーションの実践に基づいて記したが、これからのレクリエーションは、もっと社会生活との密着、生涯体育の担い手として学校教育の中でのレクリエーションを考えていきたいと思う。実践例は大学であったが、小学校・中学校・高校・大学・一般などの差別なく、それぞれの独自の流れはあっても、目的、趣旨は一つで共通するものと思う。

#### レクリエーション・ダンスを紹介

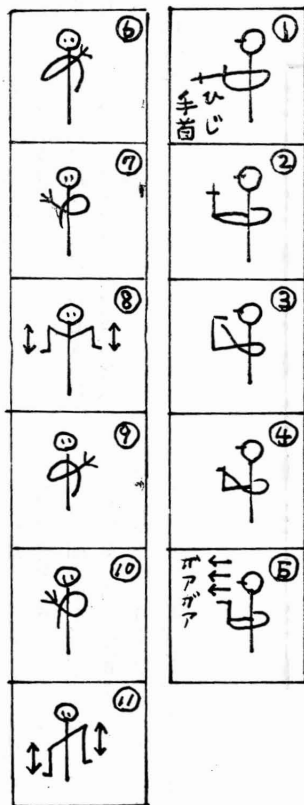
ポリウオリドゥドル (SK-540)  
隊形—自由隊形・座ったままで行う。  
前奏—8呼吸きく。

ねらい—アヒルをテーマにした動作でアヒルの鳴き声「ガアガア」と声を出して行ってもよい。座った状態の疲労回復にも良い。立って移動もできる。

踊り方

A—16呼吸

左手アヒルの口ばしの格好で鳴き声3回  
右手アヒルの口ばしの格好で鳴き声3回  
①左手肩の高さで前に伸ばし、右手で左腕の肘、手首と順にポンポンと叩いて曲げていく。(図①②③) 次に手首を回して前に曲げ3回前に出す。右手は左手肘の



下におく。(図④⑤)

②右手より同じ動作をする。

以上①、②を2回繰り返し。

\*3回手首の前に出すときは、アヒルの口ばしの表現で、このときアヒルの鳴き声を入れる。

B—16呼間

片手ずつ前通して両肩上げ下ろし、片手ずつ前通して片肩交互に上げ下ろし。

①右手指先をヒラヒラさせながら右方より左方へ顔の前を通過させる。左手より同じ動作をする。(図⑥⑦)

②両肩を上げたり下ろしたりする(2回)  
(このとき両手首を立てるとアヒルが歩

いているような感じになる)(図⑧)

③①と同じ動作をする。(図⑨⑩)

④片方ずつ肩の上げ下げをする。(3回)

(②と同じく手首を立てる)(図⑪)

C—16呼間

①Bの動作の繰り返し。